

鎌倉市中央図書館 近代史資料室だより

第6号

鎌倉市中央図書館
近代史資料担当
鎌倉市御成町 20-35
電話 0467 (25) 2611

研究ノート④

鎌倉にあった温泉旅館

進藤 和子

はじめに

鎌倉にはかつて温泉旅館が十軒あまりあった。温泉といっても温度の低い冷鉱泉で、湯船から溢れ出す掛け流しではなく、湧出量の少ない湯である。開業時期は、主に明治末から昭和中期で、若き文化人の集う場にもなり、地元の人々が憩う温泉でもあった。

うす茶色で、イオウの香りがほのかにする、肌がすべすべする湯という証言も残る湯は、温泉街をつくることなく、五つの地域に点在していた。温泉旅館はなく、

なってしまったが、今も、自然湧出し手で触れてぬくもりを感じるこゝとが出来る場所も残っている。



昭和8年案内図

1 鎌倉の温泉利用の時代背景

明治の初頭、西洋医学が公式に取り入れられ、医療機関も少なく、衛生観念も広まっていなかった。その折、疾患の予防・治療や保養のための転地を提唱したのが1876(明治9)年に政府が招へいたドイツ人医師ベルツである。その場所は、高原での森林浴・温泉地の温泉湯治・海浜での海水浴(温浴・冷浴)などであった。

ベルツは、「鎌倉は海洋性気候を利用した保養地に適している」と、鎌倉に海水浴場の開設をすすめた。その開設には、鎌倉と縁の深い内務省衛生局長の長与専齋や、幕末に藩医でありながら西洋医学を学んだ松本順などがかわった。皇族、華族、政財界人、軍人、文化人など、多くの人々が保養に訪れ、別荘を建てるなか、1887(明治20)年に設立されたのが由比ガ浜にあった海浜院である。塩化物泉と同様な成分と効能が期待でき、戦前まで温泉とされていた海水を温めて入浴する潮湯は、ここ

目次

- ◆ 研究ノート④「鎌倉にあった温泉旅館」……………1
- ◆ ミニ展示報告 「鎌倉駅伝」「金栗賞朝日マラソン」「追悼『劇画師 植木金矢』」「東京オリンピックピック1964」……………7
- ◆ 古写真(田覚寺洪鐘祭)……………11
- ◆ モニュメント⑥「向陵塚」……………12
- ◆ 古文書(小町石渡家旧蔵)……………13
- ◆ インタビュー(むかし語り)⑥……………13
- ◆ 「植木職人」 安齊千鶴子さん(坂ノ下)……………16
- ◆ 後記 近代史資料室書庫新設など……………16

から全国に広まっていった。

2 泉質と湧出の地層について

地元の人からは「鎌倉は、掘れば温泉がでる」という声をよく耳にする。水道が引かれる以前、生活水が不足していた時代に掘り抜き井戸を掘ると、ほんのり色がついた水が湧出することが各所であった。その水が温泉成分を含んだ水だったと推測できる。

温泉旅館の建てられた主な場所は、海岸から約2.5〜4キロメートルの内陸の谷戸と呼ばれる山際で、海辺は1か所となっている。

泉質は、ナトリウム・炭酸水素塩泉(旧純重曹泉)または、ナトリウム・炭酸水素塩・塩化物泉(旧含食塩・重曹泉)である。成分分析結果や証言から、炭酸水素(重曹)は、鎌倉一帯の温泉に含まれると思われる。泉色は褐色透明イオウ臭を持つ場合もあり、弱アルカリ性。湧出温度は、ほとんどが15℃〜19℃ほどで冷

鉱泉に属する。湧出地の海拔は3〜34メートルほどで、湧出量は、毎分0.1〜4リットルと多くはない。湧出深度は、地表に自然湧出または掘削深度地下5メートル以内と浅い。

この温泉を育む地層は、湧出地の地表から、5メートルほどの厚さ(場所によって異なる)を形成している腐植質層(ピート層)である。これは縄文後期、弥生時代初期頃から海退が始まり、湿地に生えていた葦や草や根が腐食してできたフミン酸を含む有機資材が、堆積してできたフカフカとした黒土のように見える腐植質(土)である。これには炭酸水素(重曹)も多く含まれている。湯の色が褐色をしているのもフミン酸に由来しており、1パーセント以下であるがイオウ分も含まれている。

この腐植質層の下、5〜25メートルほどには、シルト層(化石化していない貝殻が砂土に混じる)と砂岩泥岩互層(粒が砂より小さく粘土よりも大きい)がある。これはおよそ二百万年から一万年前に掛けて海進や海退が繰り返され、海や河口に生息していた貝や魚類の遺骸が底に沈み、その上に土砂が流入して陸地化した層である。その下には硬い帯水層がある。ここまでが沖積層で、鎌倉では深い所で30メートルほどになるといふ。そして更にその下に、最近命名されたチバニアンも堆積する洪積世地層がある。(参考資料『永福寺跡(平成3年

【地質柱図】



大船1丁目海拔12m地点『水の出る町大船』より図を作成

度発掘調査概要報告書』『神奈川県地盤地質報告(1971年)』『水の出る街大船』。

このように地層の上部から湧く鎌倉の温泉は、非火山性の温泉とされる。しかし、海の近くであるのに、同様の海水が地殻変動で地中深く閉じ込められてできた化石海水(主に塩化物泉)と異なり塩分が少ない泉質である。

3 かつてあった温泉について

鎌倉で温泉旅館や温泉銭湯が営まれていた場所は、鎌倉市の丘陵際では北西部から山崎寺分(てらぶん)、南東に向かい扇ガ谷、二階堂、十二所、海岸際では由比ガ浜である。

①山崎、寺分地域

鎌倉市の北西に位置している。JR大船駅と湘南江ノ島駅を結ぶ湘南モノレールの富士見町駅〜湘南深沢駅間にある丘陵の西側にあたる。山崎地区の温泉旅館は山崎園一軒。寺分に

は『深沢の散歩道』によると陣出園、神明温泉、神田温泉という三軒の温泉旅館があった。山崎と寺分の両者の距離は、田畑続きで1キロほどしか離れておらず隣接している。

『新編相模国風土記稿』(江戸後期調査)の「山崎村」の項に「○小名△熱海 阿多美 この地の田間より温泉沸騰す、されど常は冷にして(後略)」、続いて「△湯之本 この地にも温泉あり、熱海に同じ」とある。熱海は寺分、湯之本は山崎の小名であり、両地区とも江戸時代以前から、田の中に温泉が湧出していたと推測できる。

●山崎の温泉

❖ 山崎園(詳しくは後述)。営業期間/㊦1910(明治43)年、㊦不明。泉質/不明。浴室/大浴場、家族風呂。館内施設等/本館、離れ、散策路。

●寺分の温泉

山が迫る泣き塔の前の田から湧出していた源泉を、櫓を組んで手押しポンプで上げて配湯していた。泣き塔の西隣に陣出温泉、東隣に神明温泉があり、神田温泉については不明である。共に大正期に創業し、1942(昭和17)年に海軍工廠に接収され廃業した。この時に一帯の低い丘陵を崩して道路にし地形が変わった。

- ❖ 陣出温泉。営業期間/㊦大正期、㊦1942(昭和17)年。泉質/不明。浴室/不明。館内施設等/木造平屋建て2棟。自炊設備。湯治客が多く、料理を売る出店も来た。また「リヤカーに乗って湯治に来た人が、歩いて帰った」という効能をうかがわせる話も残っている。
- ❖ 神明温泉。営業期間/㊦大正期、㊦1942(昭和17)年。泉質/不明。浴室/不明。館内施設等/木造二階建て。遊興客も多く「芸者さんが来て宴会をしていたのを、子どもの頃に登って見たことがある」「地域の催事の際には近所の婦人などを入浴させていた」(聞き取りによる)。

接収後に大慶寺前に移転して昭和20年まで銭湯と旅館を営業していた。



寺分地区に垂れ流しで湧出している温泉。かすかにイオウの香りがする

②扇ガ谷地域

亀ガ谷坂と呼ばれる切通し近くに、明治の後半に米新亭(こめしんてい)、養気園、香風園が開業し、横須賀線ガードをくぐった反対側に、個人使用である養明泉という湯が湧いていた。

- ❖ 要山温泉・香風園(詳しくは後述)。営業期間/㊦1911(明治44)年頃、㊦1994(平成6)年頃。泉質/炭酸水素ナトリウム・硫酸イオン・硫黄などが含まれ、温泉法の鉱泉に該当。泉色/茶色。浴室/地下に、小さな洞窟の温泉とタイルの真水の浴槽があった。館内施設等/2階建て。15室。敷地面積/不明(昭和末の資料による)。
- ❖ 養気園。㊦明治末期、㊦大正(詳細不明)。米新亭の近くにあった。『現在の鎌倉』1912(明治45)年に「園内に鉱泉湧出し、諸病に特効あり」の広告がある。
- ❖ 天神湯・米神亭(こめしんてい)。営業期間/㊦1888(明治21)年、㊦1939(昭和14)年。泉質/不明。多量の炭酸を含む『日本海陸漫遊の栞』。源泉は37年前に埋めた。泉色/白く薄く濁る、黒っぽいなど日によって変化。浴室/鉄の五右衛門風呂と木の浴槽。どちらも大きくはない(聞き取りによる)。効能/胃腸病、皮膚病、汗疹など。敷地面積/不明。館内施設等/木造二階建て。客室14室。扇ガ谷・小町・大町・雪ノ下からの日帰り客も多く、

食事も提供していた。また、大八車で温泉水を運びに来ていたという証言もある。小山内薫、三好達治、海音寺潮五郎などが滞在し、大岡昇平は女将から小遣いを借りて、街に遊びに行っていたという逸話も残る。



背後に旅館が見える、米新亭の庭に立つ主人。

- ❖ 養生院・養明荘。営業期間/㊦明治中期又は大正期。㊦(平成初期)。泉質/炭酸水素ナトリウム、メタ珪酸などが含まれ温泉法の鉱泉に該当(重曹泉に近い)。浴室館内施設等/不明。清川病院所有で、温泉は明治期から使われていた可能性もある。トラックで温泉水を病院へ運搬し患者の症状改善に使用した時期もある。

③二階堂地域

二階堂の永福寺跡付近に湧出している。

- ❖ 永福荘(ようふくそう)。営業期間/㊦1931(昭和6)年、㊦1935(昭和10)年。泉質/不明。浴室/1か所で男女交代で使用。館内施設等/木造二階建て。池の上に離れ

あり。閉館後、軍需工場になり後に、松竹の寮になる。温泉使用時期は不明。源泉は敷地の東北隅にあつて、10年ほど前までは噴気抜きの煙突があつた。史跡調査の記録作成後に埋めた。



写真右上の大きな二階建ての建物と左側の小さな別棟の数棟が「永福荘」と思われる。(「永福寺跡発掘報告書」より) 写真は永福寺跡発掘調査主任福田誠氏にご提供いただく。

❖ あらめ湯
永福寺跡と道を隔てた二階堂川の川底から湧出。泉質／含食塩・重曹泉。泉温／15・5度・湧出量1・5リットル／分。風致地区につき未使用。現在は川床にある土管から自然湧出しており湯の花が確認できる。

④ 十二所地域

五大堂明王院の門前、浄明寺地区と十二所地区の境界にある泉水橋の北東約150メートルにあつた。この辺りでは、井戸を掘って田んぼへ入れたところ、稲が育ち過ぎたので分析したら温泉だったという話も伝わる。また、『十

二所地誌新稿』には、山の上に(明王院より辰巳の方角にある)祀つた弁財天の近くを掘つたら、鉱泉が出たという記録がある。

❖ 十二所園。営業期間／㊦1920(大正9)年頃、㊦1942(昭和17)年。泉質／重曹泉。暗褐色透明。浴室／薪で沸かして貯湯槽に溜め、随時浴槽へ流していた。館内施設等／敷地約300坪。木造二階建て、広間2室。客室3室および離れ。銭湯としても営業(弁天湯とも呼ばれていた)。遊興客だけでなく、近隣



現在はわずかに湧出している

住民や小坪(逗子)の漁師も歩いてやって来たという。廃業後も敷地内の土管から湯が溢れ、汲みに来る人もいた。東日本大震災後に湧出量が減少し、現在は土管の底にわずかに溜まるほどになっている。

⑤ 由比ガ浜地域

由比ヶ浜海岸から道路を隔て向かい側にあつた。

❖ 由比ヶ浜ホテル。営業期間／㊦1956(昭和31)年、㊦1976(昭和51)年。泉質／含食塩・重曹泉。赤褐色で石油臭あり。

浴室／不明。館内施設等／海水浴客が利用する旅館であつた。詳細不明。次の持ち主が雑用水として使用していた時期もあるが、現在はマンションが建ち、源泉は埋められている。

4 要山香風園について

① 香風園と田中智学

扇ガ谷の亀ガ谷坂に1897(明治30)年に仏道家である田中智学が、研学述作の場として「師子王文庫」を造つた。萱山であつた土地を取得するにあたっては、近くにあつた温泉旅館米新亭を訪れ様子を聞いている。十年余り研鑽の場としていたが、1911(明治44)年に「香風園」と名づけた庭園と温泉を愉しめる遊覧の場を開いた。間もなく温泉は「旭館」という旅館となり、宿泊もできるようになった。1919(大正8)年に雑誌発行の資金調達のため萩原長吉に売却。以降、経営者の変遷はあつたが、平成まで香風園の名は引き継がれ、鉱泉の湧く料理旅館として続いた。

田中智学は、温泉湧出に関して、『鎌倉日記』に次のように書いている。

「飲料水の良いのを得る目的で掘つたのが、一丈二三尺掘つたら、岩の欠け目から非常な勢いで、噴出して来たので、掘っている者が命からがら上にあがつて来るという勢いで噴き出した、ところが、それが緑色を帯びた水で、妙

な臭気があった、どうも飲料水にはならないが、何か含有しているだろうというので、衛生試験場に持たせてやったら、硫酸分を含んだマンガンを含有した水だったというので、それを機械で上にあげて、風呂に焚くようになって、その水に天乳泉(天福泉とも)という名をつけて、今もって香風園でそれを浴療養に使っている」これは、庭を造り、重玄洞と名づけたヤグラ(矢倉)の中を良い飲料水を得るため掘っていた際に湧出したときの様子を書いたもの。これによると掘削深度は3メートル50センチほど、湧出量も多いと推測できる。また、自身も温泉湯治に出かけることもあったことから、ここに書かれているように療養泉として入浴していたと思われる。この記述から、泉質は鎌倉一帯の炭酸水素(重曹)を含んだ温泉と同様と推測できる。

温泉を療養に使用することに効果も体感し、鎌倉経済発展の要素として興味を持っていたと思える事についても記述がある。1897(明治30)年に有志の会合で、気候風土の良さを利用した病院誘致をあげた。その候補地の選択案で、「先ず試みに、その地点を今の(扇ガ谷)梅が谷に選ぶがいい。あの田の中から一種の鉱泉が出るが、それらも利用して鉱泉浴もやり(後略)」とあり、田中智学と温泉についての関わりを知ることができる。



昭和の香風園のスケッチ画。前に庭が広がり、背後の山には見晴らし台がある。作者不明(逗子 鈴木文夫氏所蔵)

②文化人が多く集う場所としての香風園
鎌倉は多くの作家や俳人など文化人が、作品の構想を練り、心身をいやす場でもあった。香風園のみならず、米新亭、海浜ホテルなどの名がその日記や作品に登場し、鎌倉の旅館の姿を知ることが出来る。

研学の場師子王文庫



(写真提供 国柱会)

温泉が湧出した重玄洞



香風園に関して挙げてみると、里見淳が『多情仏心』を、川端康成が『千羽鶴』を執筆している。久米正雄、大佛次郎も定宿としていた。近くにあった歌人内山英保の冬柏山房を度々訪れた与謝野寛、晶子夫妻や徳富蘇峰夫妻も食事や宿泊に利用している。詩人・俳人では北原白秋が家族と正月元旦に宿泊、中村憲吉、久保田万太郎などが宿泊して作品を残している。また料理を食べ、温泉に入り、会合の場になったことは、文芸誌「文苑」や政界の機関誌「民政」の記事から様子をを知ることができる。句会の記録として徳川無声の日記に、秦豊吉、久米正雄、久保田万太郎、渋沢秀雄などと「いとう句会」を催したとある。

5 天神山山崎園について

①山崎園の開業と温泉湧出

天神山温泉・山崎園と称して、北野天神と呼ばれる天神山の西麓にあった。開業は1910(明治43)年で、創業者は宮亀年(みやぎねん)。敷地面積は田畑が一十坪、山林が三千坪ほどと言われる。山林は、現在ほとんどが鎌倉市の所有地となっている。広告の宣伝文にはラジウムを含む温泉と書かれているが、黒い湯をラジウム泉と言った時期があったので、本来の泉質は、重曹泉又は含食塩重曹泉と思われる。掘削深度も不明であるが、田に湧いていたとい

う証言からも、さほど深くはなかったと思える。創業者の宮亀年は、主に石碑に文字を刻む彫家であった。東京芝金杉に店を構えていたが、温泉経営のために六十五歳で、山崎に転居している。七十四歳で没し、墓は鎌倉円覚寺塔頭の墓所にある。

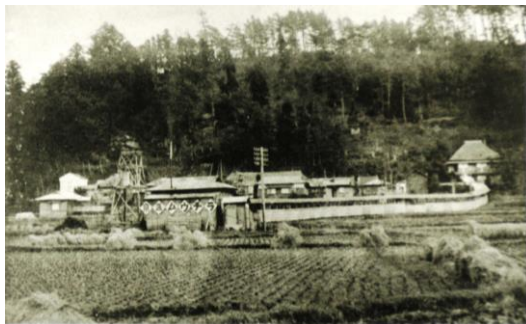
開業の経緯は、刻彫の話で鎌倉を訪れた際に、北野天神下に鉱泉が湧出しているので、温泉地としての利用を勧められたことにある。すぐに当時の深沢村村長と話を詰め、東京在住の四人の協力者を得て二十五年間の地上権借用の登記をした。このことについては、当時の江ノ島電気鉄道社長の雨宮敬次郎も「鉱泉が出るかもしれないと目をつけていた」と賛意を示している(「石工・宮亀年の生涯と事績」)。

また『鎌倉こども風土記』には、「湯の掘り抜き井戸は線路(国鉄の引き込み線)を越した田んぼの中にあつたそうである」、「明治になつて燃える水があるというので検査をした結果、ラジウムが含まれているという事だつたという」、「源頼朝の隠し湯であつた、多くの負傷した武将が手当てを行った。田んぼの中の水が傷を治すのによいと村人たちが雁番屋を建てた」という記述がみえる。

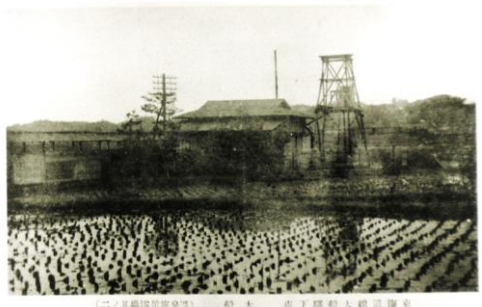
1914(大正3)年に横浜市港北区綱島に鉱泉が発見されると、客足が鈍ってしまったようである。設備投資は援助者からの借金に頼る

ところが多かつたこともあり、1917(大正六)年頃に経営を東京在住の鍋木銀次郎に引き渡した。

②絵はがきから見る山崎園



(写真右上) 温泉は、田の中に櫓を組んで井戸のように汲み上げている。櫓の傍に大きな浴場があり、やや高台にある客室と思われる建物から長い渡り廊下が造られている。(写真左上) 建物の背後の山に向つて「天神山弘法大師八十八か所」があり男坂と女坂がある。(写真左下) 霊場名と寄進者の住まいを刻んだ高さ 50cm ほどの角柱をたどって散策できた。



櫓が高く組み立てられ、当時は東海道線からも目を引いた。

まとめ

現在の鎌倉は、鎌倉幕府所縁の場所や寺社巡りを愉しめる観光地である。そこにあつた温泉は、一つの温泉文化を生み、文化人の作品や日記に記録が残り、人々の話題に登ることもある。現在でも、寺分に自由に汲むことが出来る温泉井戸があり、二階堂では僅かであるが、湧出を目で見ることが出来る。平成には、日帰り施設であるが、同様な泉質の稲村ヶ崎温泉も開業した。掘れば湧出するであろう鎌倉の温泉は、現在も地中に眠っている。

(謝辞) 神奈川県温泉地学研究所、各温泉湧出地で証言してくださった方々に御礼を申し上げます。(注) 泉質は旧泉質名で表記。

進藤和子 日本温泉地域学会所属

ミニ展示報告 平成三十年度

鎌倉駅伝

— 全国都道府県対抗鎌倉一周継走大会の歴史 —

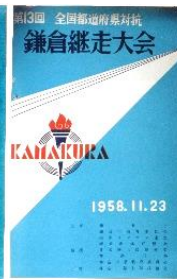
【会期】平成31年(2019) 3月

【会場】鎌倉市中央図書館1階

展示概要

戦後間もない昭和21年(1946)秋、インフレと食糧危機におびやかされていた鎌倉で、「元氣を出すにはマラソンが一番」と全国からランナーを集めて鎌倉一周継走大会が行われた。鎌倉市役所前をスタートし、巨福呂坂―山ノ内―大船(大船病院入口・現フジスーパ―前交差点を左折)―鎌倉山―龍口寺前―七里ヶ浜―稲村ヶ崎―由比ヶ浜―市役所前を3周するコースであった。(第1回目は別コース)
第1走者は1周、第2・第3走者は鎌倉山でバトンタッチし(第2回は深沢郵便局前)、第4走者がまた1周するというものであった。
この大会は毎年11月23日(第1回は10月27日、第9回は12月3日、第19回は12月13日)に行われ、昭和42年(1967)第22回大会まで続いた。

大会プログラム



プログラム表紙 (抜粋)



ハリマヤ広告「金栗マラソン足袋」 第7回・第10回プログラムより

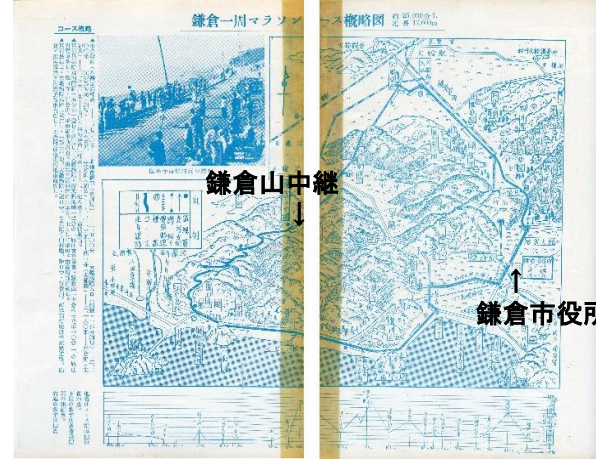


第3回大会審判長 金栗四三氏による講評 昭和23年(1948)11月23日



第4回大会 現在の大巧寺前におかれた速報板に見入る人たち 昭和24年(1949)11月23日

大会の様子



コース概略図(第9回プログラムより)
鎌倉市役所(現在の鎌倉生涯学習センター)前をスタート・中継・ゴール地点とし、反時計回りに3周するコース。4区間全長52.8キロ。

第8回

金栗賞朝日マラソン

—日本陸上競技連盟・朝日新聞社—

鎌倉市・神奈川陸上競技協会—

展示概要

昭和29年(1954)12月5日開催。戦後、初の「国際マラソン大会」。のちの「福岡国際マラソン大会」。この年のポストンマラソン優勝者カルボーネン(フィンランド)をはじめブオロッカ(フィンランド)、ゴルノ(アルゼンチン)ら5人の外国人招待選手を含めて50余人の選手が参加した。優勝はゴルノ、2位はカルボーネン、3位はブオロッカ、4位は崔(韓国)、5位に内川(佐賀県)、6位に田辺(神奈川県)だった。

当時、鎌倉には外国人選手を泊めるホテルがなかったので逗子のなぎさホテルを宿泊所とした。この他、沿道の警備、救護などで警察署、医師会の協力を求めるなど、競技そのものよりも運営全般にわたり多くの苦労があった。総裁として秩父宮勢津子妃殿下を迎え、会長は平沼亮三氏(当時日本陸連会長・横浜市長)、名誉審判長に大河ドラマ「いだてん」の金栗四三氏、審判長を「鎌倉の陸上の父」の佐藤秀三郎氏が

務めた。

コースは鶴岡八幡宮二の鳥居前をスタート、ゴールとし、若宮大路―由比ヶ浜―七里ヶ浜―遊行寺―戸塚―柏尾町を折り返すという起伏に富むものであった。大会当日は土砂降りの雨にもかかわらず、レースの観戦に熱心なファンがつめかけ、沿道は300万余の人々で埋め尽くされた。

この大会を鎌倉へ招致することになったきっかけは、昭和28年(1953)名古屋で開催された「金栗賞朝日マラソン大会」に役員として参加した佐藤秀三郎氏が朝日新聞社の重役から翌年に鎌倉市で計画をしている国際マラソンと金栗賞大会を一緒に開催しないかと話を持ちかけられたことである。「金栗賞大会」は昭和22年(1947)第1回大会以来、日本マラソンの父といわれる金栗四三の功績を記念、朝日新聞社が主催して毎年会場を変え各地を巡回して開催されていた。

当時の鎌倉は、佐藤秀三郎氏が居住していることもあってマラソン熱が熱かった。そして、戦後いち早く全国から選手を集め「鎌倉一周駅伝」の運営に注力した矢島義司郎氏(当時日本観光施設協会理事長)、市制15周年の記念行

事として国際マラソンをと意欲的な鎌倉市長草間時光の後押しもあり、話がスムーズに進んだ。これを第1回の朝日国際マラソンとして、今後、毎年鎌倉でという期待も込められて、1年がかりで準備が進められた。

ゴールが町の中心部であったために、ゴール付近につめかけた観衆がコースの中に入り、ゴールインする選手を撮影しようとする報道陣との間でもみあいがあった。この混乱が後に、国際マラソンは、陸上競技場を出発点とし、競技場に返るといふ決定をもたらした。この大会はやがて福岡国際マラソンへ発展し、再び競技場のない鎌倉でマラソン大会が開かれることはない。

参照

* 『走りつづけて 佐藤秀三郎自叙』

「走りつづけて」刊行委員会発行

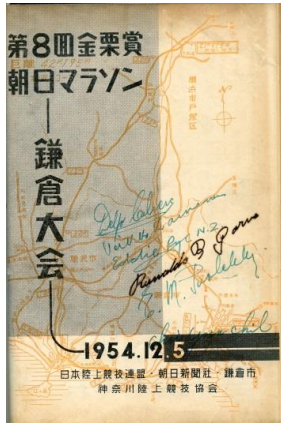
制作発行かまくら春秋社

昭和58年(1983)3月30日

* 『史実鎌倉継走・山下マラソン』島田輝彦著
発行陸上競技社

平成14年(2002)6月20日

第8回金栗賞朝日マラソン 鎌倉大会の様子



第8回金栗賞朝日マラソン
鎌倉大会プログラム表紙
外国人招待選手の直筆サインが
残されている。



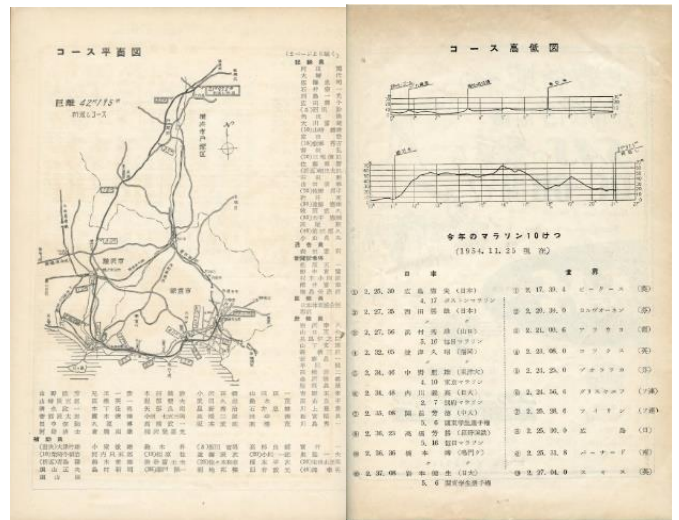
冷雨をついて七里ヶ浜を行く朝日マラソン
(神奈川新聞) 昭和29年(1954)12月5日



1952年ヘルシンキオリンピック強化合宿に向けて、
鎌倉で強化合宿が行われ、「マラソンの父」
金栗四三氏監督のもと10余名が参加した。

オリンピック選手強化合宿

昭和26年(1951)1月



コース概略図 大会プログラムより
昭和29年(1954)12月5日



鈴木屋旅館(現在のシャングリラ鶴岡)
に合宿した選手たち



選手の寄書



(前列右端) ボストンマラソン優勝者
山田敬蔵氏
(後列右端) 金栗四三氏
(前列左端) 佐藤秀三郎氏

ミニ展示報告 令和元年度

① 追悼『劇画師 植木金矢』

【会期】 12月1日～12月25日

【会場】 鎌倉市中央図書館1階

展示概要

2019年(令和元)10月11日、植木金矢氏(鎌倉市植木在住)が97歳で逝去されました。謹んでお悔やみ申し上げますとともに、心からご冥福をお祈りいたします。

氏はコミック誌で多数のチャンバラ劇画を連載し、「劇画師」として生涯現役を貫かれました。その一方、日本画の作品も遺されています。

鎌倉市中央図書館では、植木氏から寄贈された書画4点を展示し、氏の多彩な画業の一端に触れていただきました。



植木金矢氏画「静の舞」

② 『東京オリンピックピック1964』

【会期】 1月26日～2月23日

【会場】 鎌倉市中央図書館1階

展示概要

昭和39年(1964)10月7日、鎌倉の町を多くの市民の声援を受けながら地元高校生による聖火ランナーが駆け抜けた。

午後12時半頃、鎌倉市は腰越橋で藤沢市から引き継ぎ、湘南有料道路(現134号線)料金ゲート前、

市営プール前、江ノ電長谷駅前、中央公民館(現鎌倉警察署)前で中継し、小坪の姥子台で逗子市側にバトンタッチした。正走者と伴走者は応募のあった県立鎌倉高、北鎌倉女高、鎌倉学園、聖ミカエルの高校生115人が参加。市内の所要時間は約1時間。第18回オリンピック東京大会を迎える鎌倉の雰囲気各市広報課の撮影した写真で紹介。



長谷大仏前に設置された広告塔



長谷方面から下馬方面へ

下馬四ツ角の交差点を右折



稲瀬川手前から長谷方面へ

下馬四つ角付近に集まった人々



湘南有料道路の料金ゲート前

予行演習



聖火リレーの様子



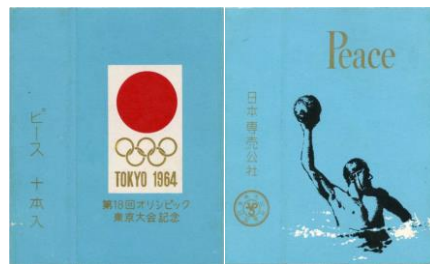
昭和39年(1964)5月27日
中央公民館(現鎌倉警察署)前



鎌倉駅東口にあったロータリーを始め、市内各地が花で飾られた。



旧市役所第四分庁舎(現鎌倉生涯学習センター)に設けられた案内所。案内所では1日4~5人で外国人観光客らに対応した。



東京オリンピック記念ピース(煙草)外箱(個人蔵)



「思い出の時」

東京オリンピック式典担当として

1964年東京オリンピック
岡部武雄氏(十二所在住)の思い出の品々
 岡部氏は、東京都の職員として、東京文化会館建設を初めとして、都内の学校・図書館の建設、東京ビッグサイト・新都庁舎の建設などのプロジェクトに、電気通信分野の技術者として長らく携わって来られました。その中でも記念すべき一コマとして思い出に残っているのが、東京オリンピック組織委員会への出向でした。組織委員会は国立競技場内に事務所があり、岡部氏は式典担当として、各国の国旗の管理や入場行進ではスペイン選手団の先導などに携わりました。展示の記念品は、一年前(1963年)に開かれた「プレオリンピック」バッジ及び本番での組織委員会身分証明書、岡本太郎デザイン記念メダル、式典委員バッジ、ワッペン、英語通訳用バッジ、記念コインなどです。

古写真

山ノ内 三島屋飯田氏提供



張り子の大鐘が山ノ内の沿道を進む。雨に備えて柿渋を塗ってある。

円覚寺洪鐘祭(大がね祭り) 昭和四十年

円覚寺弁天堂前には、鎌倉時代正安三年(1301)八月鑄造銘のある見事な洪鐘(釣り鐘)が架けられている。地元では六十年に一度、法要と付け祭りが行われる。天保十一年(庚子)八月、明治三十四年(辛丑)四月、昭和四十年(乙巳)四月と、災害などの影響で必ずしも規則的ではないが記録に残っている。明治の華やかな付け祭りの様子は栗田要蔵作「円覚寺弁才天洪鐘祭附祭絵巻」に詳しい。(参照…「明治卅四年おのがね祭と先人の足跡」・福原敏男「円覚寺弁才天洪鐘祭附祭絵巻研究成果報告書」・「青木幸蔵日誌」)

モニュメント

⑥

向陵塚



塚の中央縦に「向陵塚」の字 後ろ側に二本の白線

東慶寺の境内奥部の墓域には、多くの文化人・著名人が眠っておられる。その最奥部に、どっしりとした岩の塊が座している。表面に「向陵塚」の三字が刻まれている。

数十年前に偶然、東慶寺の門前に「向陵会同窓会」と書かれた看板が立てられ、人が集まっている様子を目にしたことがある。旧制一高の関係者がなぜ集まっているのだろうと漠然と思ったことである。

塚の右側の「由来」説明文には、次のように書かれている。

我等がここに向陵塚を建立したのは、その昔向陵の地に寝食を共にして学を修め友情を温めた第一高等学校同窓生の魂の落ち着き所として永く後世に残そうとするものであります。

第一高等学校(通称「一高」)は明治八年東京英語学校として創立され同十年東京大学豫備門と改称更に同十九年第一高等中学校となり同二十七年第一高等学校としてその輝しい歴史を繰り広げ戦後昭和二十五年学制改革により終焉となりました。

この間明治二十三年本郷向が丘(故に我等は「向陵」と呼ぶ)の地に校舎の外に寄宿寮を設け全寮制の下に切磋琢磨し幾多の人材を世に送りました。

柏葉と橄欖をあしらった校章二本の白線の帽子は口の世に有名で毎春行われた記念祭や記念祭毎に生徒達によって作られた寮歌は満天下を風靡しました。寮歌のうちでも「嗚呼玉杯に花うけて」「春爛漫の花の色」「アムール川の流血や」等現代でもよく唱われている歌が多々あります。

今はなき第一高等学校の同窓生がありし日の良き寮生活に育まれた智恵と正義(まこと)と友情の絆をいとおしみ永く我等の魂をととも止めんとした所口はかくの如くであります。

昭和五十二年五月

向陵塚建立世話人 (□は疵で欠)

この石碑には左肩に斜めの疵が入っていて、その部分は字が読みにくい。台風などの災害で木がぶつかって石板が割れたのであろう。

さらに岩の塚の裏にも建立の趣旨が、格調高く漢詩文風の文章で刻まれている。

「魂ヨ帰り来レ東西ニ南北ニ離羣索居セル先進同学ノ英魂ヨ天翔ケリ来テ俱ニ一處ニ会セヨ」と始まり、明治・大正・昭和と学生寮を中心に熱い学びの場を経てきたエリート達の気概が伝わってくる。本郷弥生町向ヶ丘から駒場への移転(昭和十年)や友を戦地へ送り出した戦争の時代を経て、昭和二十五年に終焉を迎えた。無くなったこの学校の記念碑が鎌倉東慶寺に建てられた背景には、様々な人のつながりがある。東慶寺で行われた、ある卒業生の法要の場から話が始まったらしい。東慶寺先々代住職の井上禅定師のお骨折りが大きい。東京大学インド哲学科を卒業した禅定師は、一高の名物教師(ドイツ語)であり書家であった鎌倉在住の菅虎雄氏のご子息とのご縁が深く、塚の建立にお二人は奔走された。「向陵塚」の題字は、菅虎雄先生の遺墨から取っている。

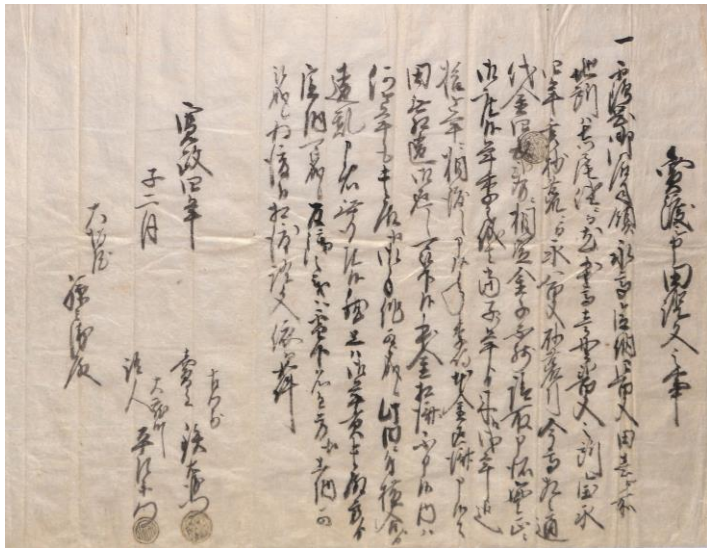
また建立世話人代表に「亀井高孝 明治卅九年 文卒・竹内潔 大正二年理卒・竹田復 大正三年文卒」の名前がある。亀井氏は歴史学者で、「鎌倉市史」編纂に尽力され「葦蘆葉の屑籠」の著書がある。塚の設計には星野昌一氏が

係わられた。

「向陵塚」には、今はなき学校への想いが詰まり、同窓生を始め、職員や遺族も含めた千数百名の奇しき縁で結ばれた向陵生活関係者の名前が銅版に刻まれているという。(鎌倉淡青会ホームページ「参照」)

古文書

小町石渡家旧蔵



売渡申田証文之事

一鶴岡御殿自領永高定納四百文田壹ヶ所地所ハ七ツをさ^三而尤本高老貴式百文之所宝永四年亥砂荒^三而永八百文砂荒引今高左之通代金四両式分ニ相定金子不残請取申所実正二御座候、年季之儀^者当子ノ年方来ル戌年迄拾ヶ年ニ相渡し申候、年季明本金返済申候^者田無相違御返し可被下候、本金相済不申候内ハ何ヶ年も貴殿^江御手作可被成候、此田ニ付横合方違乱申者無御座候、然上ハ御年貢貴殿方方定納可被成候、反銭之義ハ雪下名主方^江上納可被成候、為後日相渡証文依^而如件

寛政四年

右門前

子二月

売主 鉄右衛門

印

大蔵町

証人 平左衛門

印

大坂屋

孫兵衛殿

寛政四年(一七九二)二月に作成された田の売渡し証文である。様々な事情で田畑の質入れ売渡しが行われていたが、地名に「七ツをさ」(現在の鎌倉駅周辺)とあること、富士山宝永の噴火砂降りの影響で「砂荒」「砂荒引」が行われていたことがわかる文書である。

インタビュー(むかし語り)⑥

植木職人 お話:安齊千鶴子さん(坂ノ下)

植木職人の草分け

坂ノ下には「安齊(齊・齋)」姓の家が多い。同じ姓なので、それぞれ屋号やあだ名で呼んでいました。私の父は安齊政右エ門(まさえもん)といつて鎌倉でも早く植木屋を始め、たくさんの職人さんを使っていました。店の名前は「植松」ですが、なぜか「えんどう松ツアン」と呼ばれていました。

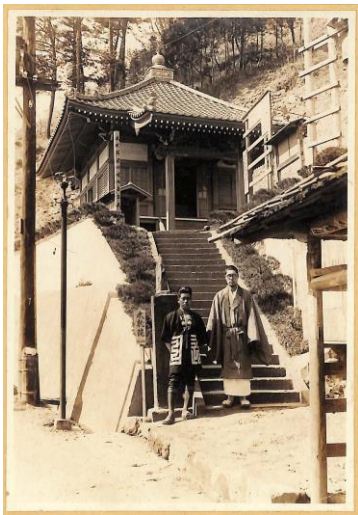
うちの位牌には天保時代の人も入っていますが、祖父岩吉(いわきち)は明治初めの人で、船を持って漁業に携わっていました。その長男の松五郎も漁師でしたが、大正3年(1914)8月25日に海で遭難して35歳の若さで亡くなってしまったんです。台風などの嵐に遭遇したのかも知れません。安齊家の跡取りが亡くなり、私の父、次男の政右エ門が家を継いだんですが、漁師にはなりません。自分には向いていないと思っていたのでしよう。

政右エ門は、明治28年(1895)生まれ、植木や造園の技術はどこかの親方についたわけでもなく、独学で学んだらしいです。家に植木に関する本がたくさんあって、うちの庭も20歳の時、初めて造った庭です。政右エ門は、

勉強が好きだったようで、高等小学校を出てから、近所の子供達を寺子屋で教えていたということ。その頃は、尋常小学校2年で終わりの子も多く、良くて4年までだったようです。政右エ門は生け花(古流)を学んでいて、お正月には床の間の水盤に松を生けていた姿を思い出します。絵も字も上手でした。

植木職人の朝は早かったです。10人ほどの職人さんに、母はお茶を出して、私も学校へ行く前に手伝いました。職人さんは、極楽寺とか地元の人が多く、荷車やリヤカーに脚立を乗せて仕事場へ向かったんです。鎌倉町内60軒くらいのお得意さんを持っていました。父政右エ門は、お弟子達が働いている現場を自転車や歩きで、ぐるぐる回って様子を見て指示をするのが主な仕事でした。松や梅など大事な木は、自分でやりましたが、ほかは出来る弟子と新しい弟子を組み合わせて進行状況を見て回っていたようです。御弁当は持たず、必ず家に帰ってお昼を食べてました。着替えてちよっと休んでまた出かけました。家にいるのは雨の日だけでしたよ。

家には山形から来たねえやがいましたが、母は何かとたいへんでした。父は、母親に「お前は子どもの教育をしる。俺は働く」と言っていたようです。



虚空蔵堂修復記念



出征を見送る



高德院大仏前で、「植松」の半纏で揃う植木職人



「植松」(安齋本家)の半纏

別荘の庭

お得意さんには、土地の旧家や大きな別荘が多くて、よく仕事をさせてもらいました。

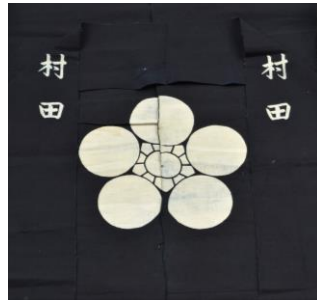
坂ノ下の「大安齋さん」「村田さん」「安利さん」、長谷の「平沼さん」、由比ヶ浜通りの「朝田さん」「武川さん」、浄明寺や二階堂方面の御屋敷など鎌倉中でした。大きな広い庭をいつもきれいに整えていました。特に朝田さんの土塀に植えられた龍のヒゲを極楽寺のおじさんが一年中毎日手入れしていた姿を思い出します。

年末には出入りのお得意さんから、邸の名前を染め抜いた半纏が渡されます。それを母が手縫いで仕上げ、正月にはそれを身につけて挨拶に廻るのが慣例でした。朝田さんの半纏は茶色でした。職人さんには暮れに「植松」の新しい半纏を渡し、正月4日には揃って挨拶に集まり、仕事は5日から始まりました。

父政右エ門がいつも丁場で筆で書いていた日誌がたぐさんありましたが、ずいぶん前に捨ててしまいました。



「朝田」邸の半纏を着て「鯛」を持って、八幡宮でお祝いをする職人



御出入りの邸(別荘)から出された半纏 仕立て前の反物 (安齊千鶴子氏提供)



(上段右より)
朝田・安利・村田・武川家
(下段右より)
廣田・高崎屋本店大木商店

跡継ぎ

政右エ門には一人息子の長男がいました。私の弟です。しかし26歳で亡くなりました。中学卒業後、家で9年間寝込んでいて、畳が腐るほどでした。その頃は結核が流行っていて、弟は菌はなくて、入院はせず、ただ家の二階で寝ているだけでした。栄養を取るため、卵も牛乳も彼のために用意しました。



腹かけ・どんぶり

良い職人がいて、私の婿にといい話がありました。したが、その人も結核で亡くなりました。その頃、葉もありましたが、高くて飲む人はいなくなりましたよ。

跡継ぎの私は、会社員と結婚しました。主人は日曜日の度に仕事場へ連れ出されて、仕事は覚えましたが、植木職は継ぎませんでした。ですから植木屋は政右エ門一代です。

思い出に残る職人さんがいます。極楽寺から来ていた年配の職人の息子さんは結婚したあと、何回も兵隊に取られ、戦死してしまい、二人の子どもさん達は父親の顔を知りません。奥さんのおけいさんは、海沿いの大村別荘(元肥前大村藩大村氏)で長らく働いていました。大村別荘は、海に面した霊山の下です。石垣で囲まれ広い庭があり、庭の真ん中に井戸もあって、皆で餅つきをやらせてもらいました。政右エ門は、年を取ったその、極楽寺の職人さん一家の面倒をずっと見ていました。

また仲良くしていた職人さんが、その後独立して今はその3代目が「石川造園」として手広く仕事をしています。



【夏場は材木座海岸で貸しボート・浮き輪の商いをした】

鎌倉頌徳会会員

政右エ門は、長生きで、昭和54年(1979)に85歳で亡くなりました。2週間位寝込んでスツとね。その時の鎌倉市長渡辺隆氏の弔辞が残っています。今まで、よく読んだことも無かったけれど…。

弔辞には「…時代は満州事変から上海事変へと戦争が拡大された時代に始まり、太平洋戦争の勃発により戦乱の坩堝の時代、さらに終戦直後の食糧難、住宅難にあえぐ混乱の時代に亘る、まさに茨の道の連続であったと存じます。あなたは生来の温厚篤実なご性格と誰にでも親切に語りかけられる面倒見の良いお人柄から地域住民の信望きわめて厚く、常に良き相談役として、ただ一念地域の福祉向上発展に大きく寄与されたのであります。…昭和31年に頌徳会会員としてお迎えいたしました。…」と立派なことが書かれていますね。長年鎌倉市政に貢献した人が会員になっている「鎌倉頌徳会」に迎えられるんですね。民生委員として生活に困った人の面倒をよく見ていたことを思い出します。

何の役をやっていたのか、昭和8年(1933)御成小学校が新築されたときには、挨拶をしたらしい。政右エ門38歳でした。また坂ノ下の権五郎神社に神主さんがいなかったとき、八幡宮さんから宮司さんを招くお世話をした

と聞いています。

植木職人の仕事は、75歳くらいで退いたと思います。(2019年11月 聞き手・平田)

【後記】

昨年平成三十一年令和元年には、図書館内で三階多目的室が「書庫」になり、近代史資料室が多目的室と視聴覚ライブラリー室に、近代史資料室は事務室内へ移転となりました。

同時にホームページのリニューアルによって資料室コレクションもパソコンから見ただけできるようになりました。今後も資料の整理公開を進め、皆様により良く利用していただけるよう努めたいと思います。



新しい書庫

「近代史資料室だより」第6号
発行 鎌倉市中央図書館

近代史資料担当

令和二年四月一日